碑（いしぶみ）の記憶 ～石碑編～ ㉘

宮古市・鍬ケ崎地区

生死を分けた幻灯会

藩制時代から交易で栄え、サンマ漁船の集結基地や遊郭がありにぎわった宮古市の鍬ケ崎（くわがさき）地区。戊辰戦争（1868～69年）では宮古港海戦の舞台になった同地区は宮古湾に面し、幾度も津波に襲われてきた。

「東日本大震災　宮古市の記憶」（同市刊）によると、1896（明治29）年の大津波では100人が死亡し、701戸中350戸の家屋が流失、半壊した。

心公院の敷地にある明治の津波の記念碑は、同地区の有志が1908（明治41）年に建立。碑文は風化し判読できないが、鍬ケ崎小教員だった花坂徹さん(58)らが2014年に標柱を建て、存在を伝えている。

石碑には地震発生時、同校で幻灯機を使った鑑賞会を開いており、大勢が助かったと記されている。この出来事は「鍬ケ崎ものがたり」や絵本「幻燈会（げんとうかい）の夜」でも紹介されている。

1933（昭和8）年の大津波では24人が犠牲になり、住居21戸が壊された。その後も海の町として繁栄を続け、昭和30年代にはサンマ棒受け網や北洋サケ・マス漁の拠点として全国に知られた。映画館や銭湯、ホテルもあり、まちは大いににぎわった。

明治29年6月15日、夕暮れに地面が2回揺れ、海上で大きなごう音が聞こえた。すぐに数回の大きな波が起こり、3回打ち寄せた。2回目が最も激しかった。あらゆる港が阿鼻叫喚（あびきょうかん）の惨状となり、悲惨の極みだった。

この時ちょうど町の小学校の幻燈会で児童や保護者らが集まり、津波を免れた人が多かったのは不幸中の幸いといえる。13回忌に被災者を弔い、碑を建て後世に伝える。

（一部略、現代語訳）

防災教育いかに継続

震災伝承室で、今までの取り組みや展示資料を説明する坂下正義前校長（右）

東日本大震災で鍬ケ崎地区は南北から津波が押し寄せた。防潮堤がないため、平たん部の家屋がほぼすべてなぎ倒され、がれきに覆われた。犠牲者は57人、住家と非住家計1112戸が被災した。

宮古市熊野町の鍬ケ崎小（林一広校長、児童147人）は、2006年に防災かるたを製作。13年に震災伝承室を設置し、これまでの津波防災学習や復興するまち並みを紹介している。

しかし、震災時と伝承室設立時の教諭らは転勤し、今後の防災教育を再検討する時期に来ている。

前校長の坂下正義・現重茂小校長は18日、鍬ケ崎小を訪れ、教師らにこれまでの取り組みや、自身が考える今後の防災教育の具体例を紹介した。

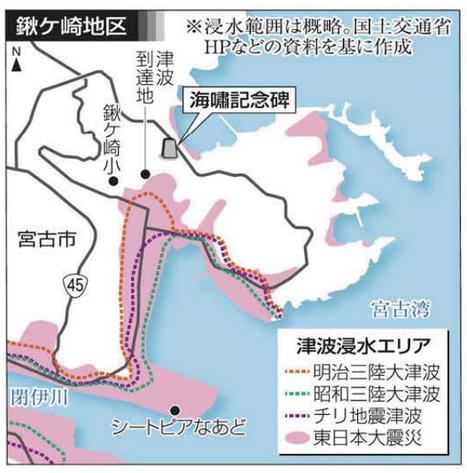
坂下校長は「震災後の漁業や災害公営住宅について調べるなど、被災と直接関係ないことでもできることはある。震災伝承室を見て課題意識を持ったことに、児童と共に取り組んでほしい」とアドバイスした。

震災から8年1カ月余。区画整理事業も完了し、住民の心配は今後の町のにぎわいだ。震災前に銭湯を営んでいた同市鍬ケ崎仲町の袰岩政子さん(79)は「戻ってこない人も多く、空き地も目立つ。今後どうなっていくのか」と憂う。

市によると、区画整理事業で引き渡した土地の約2割で利用の見通しがたっていない（18年2月時点）。市は、空き地と利用希望者のマッチングを行うなど空き地解消に取り組む。

津波のたびに形を変え、復興を遂げてきた鍬ケ崎地区。今回の大災害を乗り越え、本当の意味で復興する日まで歩みを続ける。

宮古湾に面し山に囲まれた鍬ケ崎地区。区画整理事業で引き渡したエリアで空き地が目立つ（本社小型無人機から撮影）



2011年3月13日　津波で平たん部の家屋の大半が流され、がれきで埋め尽くされた鍬ケ崎地区

この連載は岩手日報HPでも公開し随時更新します

岩手日報社　IBC岩手放送　Supported by Google News Initiative　東日本大震災

けんか七夕 旧町名復活

陸前高田 祭り山車「鉄砲町」と「八日町」

陸前高田市の気仙町けんか七夕祭り保存連合会（佐々木富寿夫会長）は、8月7日の祭りに向け、鉄砲町と八日町の2組で山車を製作する。東日本大震災後は協力して2台の山車を製作してきたが、高台団地の造成や住宅再建に合わせて旧町内会の名称を復活させ、参加者増加を図る。

約30人が出席した13日の総会で旧町内会の名称復活を確認。会員から「昔の名前のほうが誘いやすい」「2台で競争意識を持つことは大切だ」などと賛同する意見が相次いだ。

約900年の歴史がある同祭りは震災前、今泉地区の上八日町、下八日町、鉄砲町、荒町の4町内会が山車をぶつけ合っていた。震災後の2011年は唯一残った山車で運行。翌年にもう1台作って「けんか」を復活させた。

昨年までは今泉組と気仙組の山車2台を製作してきたが、今年は八日町、鉄砲町のメンバーがそれぞれ製作。飾りのデザインを決めた後、5月8日に製作を始め、山車を組み立てる山車組みを7月14日に行う。

会場は昨年と同じかさ上げ地を予定。佐々木会長(65)は「（地域外で避難生活を送り）今泉地区のかさ上げ地などに戻った人らにもう一度まつりに参加してほしい。震災後頑張ってきた人、参加してくれる若い人たちの気持ちも大事にしていきたい」と話す。

乗客守る道確認入念

宮古・客船来港前訓練

津波避難経路を確認する参加者

宮古市の宮古港クルーズ船おもてなし本部（本部長・花坂康太郎宮古商工会議所会頭）は18日、同市磯鶏の同港フェリーターミナルで、25日に寄港する大型客船ダイヤモンド・プリンセス（約11万6千㌧、乗客定員約2700人）をもてなすボランティアらの津波避難訓練を行った。

通訳ガイドや観光関係者ら約30人が参加。市職員の誘導で、同港から約1㌔離れた高台へ二手に分かれて徒歩で避難し、経路を確認した。

わむら公園高台に避難した約20人は、坂道を約18分かけて目的地に到着。同公園の水道やトイレが使えるかなどを確認した。

ダイヤモンド・プリンセスは8割が外国人客で、約2700人が三陸沿岸を旅する見込み。外国人客をもてなすボランティアの本田理子さん(72)＝同市小沢＝は「自分の足で歩かないと避難誘導するときに困る。高齢者も多く来ると思うので、訓練を生かしたい」と気を引き締めた。

同本部の第4回会議も開き、参加者約70人が当日の動きや持ち場を確認した。

めがね橋演奏会 復興へ募金寄付

遠野市に実行委

遠野市のめがね橋復興応援三陸コンサート実行委員会（八重樫正昇（まさのり）会長）は17日、同市宮守町で3月中旬に開いたコンサートなどで募った19万4575円を東日本大震災の復興支援として市に寄付した。

八重樫会長(72)、佐藤良治副会長(60)らが市役所を訪問。「今回で8回目。震災の風化防止のためにも有効に使ってほしい」と本田敏秋市長に目録を手渡した。

同実行委は被災した音楽家らを招いたコンサートを2012年から毎年開催。会場で募金活動を行い、今回を含め計119万3933円を市に寄付している。

本田敏秋市長（左）に思いを託す実行委メンバーら

Jヴィレッジ駅 サッカー一色に

福島、あす開業

東京電力福島第1原発事故の対応拠点となったサッカー施設Jヴィレッジ（福島県楢葉町、広野町）の20日の全面再開に合わせ開業する、JR常磐線の最寄りの新駅「Jヴィレッジ」が17日、報道陣に事前公開された。

構内にはサッカーのゴールポストをモチーフにした事務用の施設や、サッカー日本代表がワールドカップ（W杯）や五輪で優勝した時にトロフィーのレプリカを展示するための台座がある。代表のイメージソングを流して雰囲気を盛り上げる。

駅は木戸―広野間にあり、Jヴィレッジなどでのイベント開催に合わせて停車する臨時駅となる。改札口からJヴィレッジの入り口までは徒歩で約2分。利用者の利便性が向上しそうだ。

総事業費は約15億円で、福島県とJR東日本、地元町村会が約5億円ずつ負担。20日に開業し大型連休最終日の5月6日まで臨時で列車が停車する。

開業を前に報道陣に公開されたJR常磐線の新駅「Jヴィレッジ」＝17日午後

帰省のたび復興実感

東京都西東京市 看護師 今入（いまいり）栄介（ひですけ）さん(42)

釜石市只越町出身。母が亡くなり、遺志により香典の一部の50万円を市に寄付した。震災復興やラグビーワールドカップ（W杯）に役立ててほしい。帰省のたびに復興を実感する。新日鉄釜石のラグビー日本選手権7連覇を見て育ったので、W杯で盛り上がる釜石を楽しみにしている。住民が明るく笑顔で過ごせるまちになってほしい。古里のために今後もできることをしていきたい。

題字 山下文男さん

いわて漁業無線情報（18日）

◆釜石無線局所属船

▼操業船

北上丸	16時釜石発サケひき網調査向け、調査後18日2時30釜石入港
18欣栄丸	176回目操業中
53欣栄丸	26回目操業中
81欣栄丸	入れず
83欣栄丸	40回目操業中
85欣栄丸	操業中
88欣栄丸	続航中
128欣栄丸	199回目操業中
138欣栄丸	236回目操業中
151欣栄丸	操業中
158欣栄丸	操業中
51勝運丸	11回目操業中
151勝運丸	操業中
68清福丸	南下中
88清福丸	18日14時ベノア港発沖へ

▼マグロはえ縄船

災害義援金受け付け

【東日本大震災】

◆銀行振り込み
▽岩手銀行本店（普）2135547
▽北日本銀行本店（普）7028487
▽東北銀行本店（普）3237448
▽盛岡信用金庫本店（普）0354142
▽東北労働金庫盛岡支店（普）5858584
▽岩手県信連本所（普）0027190

◆岩手日報社窓口
本社と二戸、花巻、北上、奥州各支局と一関支社で。平日の午前10時～午後4時（土・日・祝日は除く）。
※口座名は、岩手銀行は「（株）岩手日報社義援金口」。他は「（株）岩手日報社」。同一銀行からの振り込み手数料は無料（窓口取り扱いのみ）。

【北海道胆振東部地震】

◆岩手日報社窓口
本社事業部で平日の午前10時～午後4時。土・日・祝日は除く。
◆振り込み
▽ゆうちょ銀行・郵便局00130-1-673591
口座加入者名「日赤平成30年北海道胆振東部地震災害義援金」
※受領証の発行を希望する場合は、通信欄に「受領証希望」と記載のこと。

【西日本豪雨】

◆岩手日報社窓口
本社事業部で平日の午前10時～午後4時。土・日・祝日は除く。
◆振り込み
▽ゆうちょ銀行・郵便局00130-8-635289
口座加入者名「日赤平成30年7月豪雨災害義援金」
※受領証の発行を希望する場合は、通信欄に「受領証希望」と記載のこと。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。